

住民主体の村づくりにみる里地里山づくり / 福島県飯舘村の事例 - 集落単位での地区別計画とその事業化 -

糸長浩司
日本大学生物資源科学部教授
2003年度

(1) 住民主体の村づくりの概要

飯舘町の事例は旧村単位であるが、この飯舘村の事例はその下の集落領域での計画とその事業展開の事例である。人口6600人程度の村であり、村の第4次総合計画策定(1994年)に際して、村の行政計画の他に、20地区(集落)単位での地区別計画を作成することを決めた。地区別計画の指導として糸長が当たり、20地区別計画策定には、行政職員2名ずつ計40名がコミュニティ担当者として策定に関わった。策定された地区別計画は、村の総合計画書の地区別計画として掲載された。

策定された地区別計画を住民が策定後、自主的に事業実施を進めるために、村は10年間で各地区1000万円の活動費を補助費として用意した(このような事例は数少ない)。その1割の100万円は各行政区での自己負担となる。基本的にはソフトな地区活動への活用を推奨するものである。各地区での具体的な実施計画の認定は、各地区が詳細な実施計画書を各地区の代表者からなる「地区計画協議会」に提出し、それを審議し、了承された事業予算が村より各地区に補助される。「地区計画協議会」は地区間の実施計画の調整と住民参加のむらづくり連携・研修的な機能を果たす。

2004年度で完了するので、次の第5次総合計画の策定と合わせて、新たな地区別計画を策定実施のために、14年度から地区別計画の実施の評価作業を住民と行政で開始している。

(2) 地区別計画事業の実施状況

地区別計画はソフト面を重視することを強調してきたため、地区内外交流活動事業や文化の保存、継承事業。地区内外交流活動事業、文化の保存継承事業の計画が多い。多くの地区がコミュニティ形成、地区内外の交流、文化の保存というソフト面重視の計画を立てている。ハード面で基盤整備事業という公園、水洗トイレ、集会所などの改造計画である。

多くの地区が文化の保存継承にかかわる事業に力を入れている。特に法被の購入を行っている地区が多く、それをきっかけとして婦人会活動が活発になり、文化の保存、継承につながっている。また、田植え踊りや盆踊りのための太鼓や衣装を購入して、各地区が競い合いながら練習に力を入れるという良い傾向が見られた。次いで地区内外交流活動事業に力を入れている地区が多く、炭焼き小屋と販売施設を「コミュニティ事業」的展開している地区もある。

ソフト面重視の景観、アメニティを意識した環境整備事業では鯉を放流したり、植樹を行ったりした地区が多く見られるが、その後の維持管理の問題を心配する傾向がある。ソフト面重視の計画実施では地区内外交流活動事業、文化の保存継承に関する事業への資金の割り振りが多い。その他、新しい文化創造に関する和太鼓の練習やN T T回線を利用したミニ情報防災、放送整備がある。ハード面では、公園、トイレなどの生活基盤整備事業や公民館のディケアー施設としての集落福祉的な整備改造もある。

(3) 地区別計画事業の評価

第5次総合計画策定に向けて、第4次総での地区別計画の評価作業を筆者が助言して住民と行政で実施しておりその結果をしてみる。2002年度の地区別計画推進評価作業は、行政レベルでの評価(各部署別での地区別計画に対する評価)、地区別協議会での評価(各地

区自己評価を比較検討), 各地区での評価(共通の評価シート), 村民自身の評価(アンケート)で行っている。ここでは, 補助金支出項目での評価, 村民評価アンケートを報告する。

1) 補助金支出項目からみた地区別計画実施の評価

ソフト系とハード系で半々である。ソフト系は多様な活動費があり, 踊りや祭り等の「伝統文化の保全と継承」が最高で 16.9%である。ハード系事業は費用がかかるが, その結果として地域内での経済振興やコミュニティ活性化にどう発展したかが重要となる。アンケートを見ると支出金額が 5.2%程度の景観美化・自然復元活動への評価は高く, 投資効果が高い。一方, レクリエーション環境整備はアンケートでの評価が低く, 子供達の評価も厳しく, 今後の課題である。なお, 行政区ごとの支出細目で, 事業実施タイプを表 2 のように分類した。タイプ分けした結果, レクリエーションは 7 地区、次いで生活環境、伝統文化の保存と継承タイプの各 4 地区となっている。ハード系は 11 地区で過半数である。

表 - 1 地区別計画事業の活動補助金の支出細目別での金額と比率表(2002年11月現在)

	ソフト事業							ハード事業		合計	
	計画策定活動	教育・生涯学習活動	伝統文化の保全と継承	新しい文化創造	地区内外の交流	景観美化・自然復元活動	産業振興	生活環境整備	レクリエーション		
金額(万円)	830	334	2,570	333	1,021	778	888	3,761	4,671	15,186	
比率	5.5%	2.2%	16.9%	2.2%	6.7%	5.1%	5.8%	24.8%	30.8%	100.0%	
行政区分内は1,000万円の支出済みの割合	A (50~80%)	10%	2%	9%			8%		71%		100%
	B (50~80%)	6%	9%	7%			11%		67%		100%
	C (80%以上)	5%		7%		2%	5%			80%	100%
	D (80%以上)			22%						78%	100%
	E (50~80%)	5%	11%	23%		16%	2%			43%	100%
	F (50~80%)			56%					44%		100%
	G (80%以上)	14%				6%			16%	65%	100%
	H (50%未満)	12%		5%	61%	10%			13%		100%
	I (80%以上)	3%		15%				6%		77%	100%
	J (50%未満)	13%	14%	50%			24%				100%
	K (80%以上)	4%		6%		33%	23%	3%		31%	100%
	L (50%未満)	19%		81%							100%
	M (50~80%)	6%	9%	24%	4%	26%	16%		11%	3%	100%
	N (50~80%)	5%		3%			21%			71%	100%
	O (80%以上)			25%					74%		100%
	P (80%以上)	2%							98%		100%
	Q (80%以上)	3%				1%		43%	14%	39%	100%
	R (50%未満)	17%		83%							100%
	S (50~80%)	4%		38%		19%		39%			100%
	T (50%未満)	12%	5%	12%		15%				56%	100%

K、M、S、E(複合化型)は一項目に補助金を集中せず、多様な項目にバランス良く活用し、地区は地区活性化に大きく反映している。表 2 テーマ別の事業実施タイプ



写真 地区別計画で実施した炭焼きビジネス

ソフト	伝統文化の保存と継承タイプ	F、J、L、R
	新文化創造タイプ	H
	地域内外交流タイプ	K、M
	産業振興タイプ	Q、S
ハード	生活環境整備タイプ	A、B、O、P
	レクリエーションタイプ	C、D、E、G、I、N、T

複合化タイプ E、K、M、S

2) 村民の地区別計画事業の評価

全世帯対象のアンケート(2002年11月実施)の回収数・有効回答数は1,073票(60.1%回収)であった。『地区別計画』の知名度、関連事業への参加は、全体の3分の2程度である。地区の変化の評価が高いのは環境系(8、11)と福祉系(19)で、一方、経済系(15、16、17)や交流系(20、21)は評価2.5程度である。地区全体の活性化(23)評価は、3を若干下回っているが、高齢者、女性の活性化は評価されている。

計画の推進体制については、1,000万円の補助金(24)の評価は高いが、一割負担感はある。注目すべきは地区別計画に関する情報発信(27)と村づくりに関する勉強会(30)が必要性への評価が高いこと、また策定にかかる時間を増やすべき(34)との評価も比較的高い点である。計画策定や推進方法に十分な時間をかけ、新たな人づくりが重要となる。補助金継続(35)は3.5以上と高く、特に自由性(39)を求める意識が高い。

ハード系事業では計画段階で位置づけとその後の運営、波及効果等を十分に検討しておくことが不可欠である。直売所設置K地区では、地区の産業振興に寄与し、他地区と比して地区別計画の推進により活性化したという評価が高い。集会所増改築等に98%も支出したP地区では、ミニディ・サービス等の充実への評価は高いが、地区の活性化への評価は低い。ハード系事業を地域の社会、文化、経済振興にどうつなげるかが課題となる。一方、ソフト系は成果の出たものと、出なかったものに分かれた。例えば、交流系はソフト系で2番目の支出であるが、村民からの評価はまだ低い。計画-実施-評価のプロセスとそれに伴う情報発信の継続性、またそれを担う人づくりが重要となる。バランスよい活動補助金の支出をしている地区での住民評価は高いものがあり、単発的ではない継続的で多面的な活動の計画と実施がポイントとなる。



写真 地区別計画の自己評価報告会

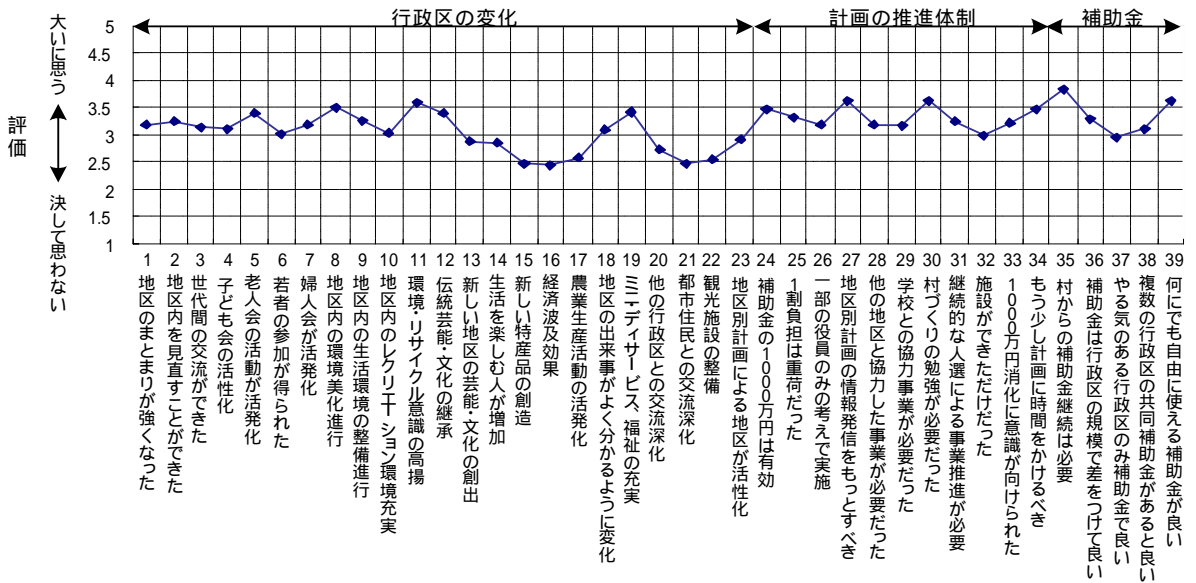


図 1 村民アンケート調査評価平均値

(2) 田園ライフ讃歌 / 「クオリティライフ」から「までいライフ」へ

1) すてきな田舎暮らし / 「クオリティライフ顕彰」

飯館村の平成7年度から実施している第4次総合計画のキャッチフレーズは「クオリティライフ」であり、田園生活の質をどう高めるかである。この時に、村民がイメージする生活の質、生活の向上のイメージは多様であり、中には、都会的な暮らしの質をイメージする人達も出てくる。そこで、村は「クオリティライフ顕彰」事業により、改めて飯館流の田舎暮らしとは何か、田舎でしかできない暮らしの魅力を村民に提示することにした。それを「クオリティライフ顕彰」事業として展開した。「すてきな田舎人」の発掘と表彰をテーマとし、「田舎に住むことの誇り」を村民に再認識してもらうことを目的とした。

審査員は筆者のみ村外人でそれ以外は村民である。自薦他薦での応募を受け、現地調査によるインタビュー審査を含めて、3～5名が毎年表彰される。審査基準としては、エコライフ、リサイクル、創造的な活動、地域を豊かなる活動等、田園環境を生かした暮らしを楽しんでいる暮らしを表彰することにある。表彰者には金10万円相当のクオリティライフ向上のための希望品が贈呈される。今まで表彰された人達は多様です。国際交流も手がける節約型の有機畜産農家、田園環境の見える店先で農産物の直売をするコーヒー店、「若妻の翼」でヨーロッパ農村を見て村の活性化に寄与する農村女性グループ等多彩である。審査員として、筆者が下記のような好評文を村の広報に書いたのをそれを引用する。

「自然が宝」の「クオリティ・ライフ・いいたて」

第4次総合計画の下での「クオリティ・ライフ顕彰事業」も今回で4回目となった。「すてきな田舎暮らし」を楽しみ、創造的な暮らしを実現している村人達はまだまだたくさんいる。21世紀も3年目、バブル経済破綻の後遺症の厳しい経済状況下、持続性のない都市暮らしに対して、生きるための糧や環境が豊富にある農山村での暮らしの持続性が益々見直されてきている。

今回表彰された人達の暮らしの魅力は次のようである。山や川にある自然素材、廃棄物をたくみに利用した芸術品・日用品の創造と創作普及活動、自家堆肥づくり・土づくりとユニ

ークな農産物の開発・保存・販売開拓という生産・保存・販売をつなぐアイデア溢れる「百姓の仕事」、東京から移住し10年に渡る「魅力的で創造的な田舎暮らし」を家族一緒に実現している「偉大な新田舎人」の暮らしである。飯舘流「クオリティ・ライフ」は着実に育っている。現地審査や審査委員会でもすてきな言葉が数多くあった。「ゆっくりと足元から見直していく」、「自然が宝」、「人と違うものをやりたい」、「ここに住む魅力は年をとるにしたがって感じる」、「ここにいて良かった。自分のものを自分で作って暮らしていける/自分で作って食べられる幸せ」、「作ることが楽しみになっていく」等々である。飯舘村で暮らすことの誇りと自信、「クオリティ・ライフ・いいたて」を表現している言葉である。懸賞の審査委員会の後、高知県で橋本知事とシンポジウムをした。タイトルは「高知県環境自律宣言」、高知県全域での環境共生型での自給自足的な地域づくり、そのモデルとなるエコビレッジづくり、山彦、里彦、海彦の宝を連携させる流域的な仕組みづくりを語った。今年、このような農山村の地域資源、山彦、里彦を活かした暮らしの更なる創造のチャレンジが、全国各地で起きようとしている。飯舘村はそれに先んじて、「クオリティ・ライフ」の実践を着実に重ね、そして、その成果を次の総合計画につなげる年となる。



写真 自然素材や廃布を活用して手作り人形を創作する女性のアトリエ



写真 Iターンした人が経営する体験工房

このような田舎生活を満喫する魅力的な田舎人に会えるツーリズムこそ、本当の農村ツーリズムであるといえよう。

2) 飯舘流スローライフ/「までいライフ」～「までいツーリズム」

現在、飯舘村では時期の総合計画づくりを行政と住民とのパートナーシップで進めている。田舎暮らしに固執した、次のキャッチフレーズとして、「スローライフ」が提唱された。田舎の良さを生かした暮らしの実現は、都会型のファーストライフではないであろう。クオリティライフの展開として、「ファーストライフ」が提示された。そして、この言葉をより、地域密着型の言葉として、村民達に理解してもらうために、地域固有の言葉として、「までいな暮らし」、「までいライフ」が提唱され、村民の理解と共感を得ている。「までい」とは、この地域でせも使われる東北地方の方言である。じっくり、丁寧にとという意味を持

つ。「までいにこどもを育てる」、「あの大工の仕事はまでいだ」という表現がある。地域固有の言葉であり、都会的なスピードのみを追求した暮らしや、仕事のあり方とは別で、地域固有の環境の中で、ゆったりと時間をかける仕事や、時間の使い方を意味する言葉として今一度、見直してみることをする。ブームとなっている「ストローフード」、「スローライフ」にあるような地産地消的な暮らしのあり方を表現するのに、英語ではなく、地域の言葉、方言として表記することの重要性が指摘できる。お年寄りには、英語での「スローライフ」ではなく、「までいな暮らし」、「までいライフ」が親しみやすいようである。このキャッチフレーズを元に、「飯舘流までいな暮らし」を実現していくための施策づくりが今、行政と村民一体となって進められている。その計画の中で、どう都市農村交流、「までいなツーリズム」を実現していくべきかも検討されている。

注) 本報告は、日本大学系長研究室での、系長浩司、金本崇志の共同研究の一部である。